

氏 名	藤田 澄吾子
学 位 の 種 類	博士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 6275 号
授 与 報 告 番 号	甲第 3560 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	Impact of Concomitant Coronary Artery Disease on Atherosclerotic Plaques in the Aortic Arch in Patients with Severe Aortic Stenosis (重症大動脈弁狭窄症例における冠動脈疾患合併と大動脈弓部プラークとの関連について)
論 文 審 査 委 員	主 査 葭山 稔 教授 副 査 稲葉 雅章 教授 副 査 柴田 利彦 教授

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】重症大動脈弁狭窄症例では、しばしば冠動脈疾患を合併することが報告されている。しかしながら、脳卒中のリスクである大動脈弓部の動脈硬化性 complex プラークの存在と大動脈弁狭窄症における冠動脈疾患の合併との関連についてはよく知られていない。本研究は重症大動脈弁狭窄症例において、経食道心エコーで検出した大動脈弓部プラークと冠動脈疾患の合併との関連性について検討した。

【対象と方法】対象は経食道心エコーおよび冠動脈造影検査を施行した重症大動脈弁狭窄症 154 例（平均年齢 72 ± 8 歳，男性 71 例，平均大動脈弁口面積 $0.67 \pm 0.15 \text{ cm}^2$ ）。大動脈弓部プラークは経食道心エコーを用いて評価し，complex プラークは最大厚 4mm 以上のプラーク，潰瘍性プラーク，可動性プラークと定義した。

【結果】重症大動脈弁狭窄症 154 例中，冠動脈疾患の合併は 46 例（30%）であった。冠動脈疾患を有する群では有しない群と比べて，すべての大動脈弓部プラーク（87% vs. 70%; $P=0.03$ ）および大動脈弓部 complex プラーク（48% vs. 20%; $P<0.001$ ）の検出率が有意に高かった。動脈硬化危険因子を含めた多変量解析を施行したところ，冠動脈疾患の合併は complex プラークの独立した関連因子であった（オッズ比：2.86，95%信頼区間：1.23-6.68， $P=0.01$ ）。

【結論】重症大動脈弁狭窄症例において，冠動脈疾患の合併は大動脈弓部の高度動脈硬化性病変と密接な関連を認めた。本研究の結果より冠動脈疾患を合併する大動脈弁狭窄症では，脳卒中のリスクがより高いことが予想され，これらの症例では脳卒中のリスク層別化のために経食道心エコーを用いた大動脈弓部 complex プラークの注意深い評価が必要であると考えられた。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

重症大動脈弁狭窄症例では，しばしば冠動脈疾患を合併することが報告されている。しかしながら，脳卒中のリスクである大動脈弓部の動脈硬化性 complex プラークの存在と大動脈弁狭窄症における冠動脈疾患の合併との関連についてはよく知られていない。本研究は重症大動脈弁狭窄症例において，経食道心エコーで検出した大動脈弓部プラークと冠動脈疾患の合併との関連性について検討した。

対象は経食道心エコーおよび冠動脈造影検査を施行した重症大動脈弁狭窄症 154 例（平均年齢 72 ± 8 歳，男性 71 例，平均大動脈弁口面積 $0.67 \pm 0.15 \text{ cm}^2$ ）。大動脈弓部プラークは経食道心エコーを用いて評価し，complex プラークは最大厚 4mm 以上のプラーク，潰瘍性プラーク，可動性プラークと定義した。結果は，154 例中 46 例（30%）に冠動脈疾患の合併を認めた。冠動脈疾患を有する群では有しない群と比べて，すべての大動脈弓部プラーク（87% vs. 70%; $P=0.03$ ）および大動脈弓部 complex プラーク（48% vs. 20%; $P<0.001$ ）の検出率は有意に高かった。動脈硬化危険因子を含めた多変量解析を施行したところ，冠動脈疾患の合併は complex プラークの独立した関連因子であった（オッズ比：2.86，95%信頼区間：1.23-6.68， $P=0.01$ ）。重症大動脈弁狭窄症例において，冠動脈

疾患の合併は大動脈弓部の高度動脈硬化性病変と密接な関連を認めた。本研究の結果より冠動脈疾患を合併する大動脈弁狭窄症では、脳卒中のリスクがより高いことが予想され、これらの症例では脳卒中のリスク層別化のために経食道心エコーを用いた大動脈弓部 complex プラークの注意深い評価が必要であると考えられた。

以上の研究は、冠動脈疾患を合併する大動脈弁狭窄症において、経食道心エコーを用いて脳卒中のリスクである大動脈弓部 complex プラークの評価を行うことの重要性を示したものであり、周術期の脳卒中のより詳細なリスク層別化に貢献するものである。よって本研究者は、博士(医学)の学位を授与されるに値するものと認められた。